平成２６年９月１日発行

かまぼこ

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会
第５３号

わがまちの顔

栗田 信生さん

作・編曲家

今回、わがまちの顔は、西蒲田三丁目にお住まいの栗田信生さんをご紹介します。

栗田信生さんは現在、『紅白歌合戦』『歌謡コンサート』『ＢＳ日本のうた』『題名のない音楽会』（ＮＨＫ）をはじめ、数多くのテレビ番組の編曲を受け持っています。

アーティストからの信頼はたいへん厚く、『ふたりのビッグショー』では、十年間の音楽監督および編曲、オーケストラ指揮者として毎週出演し、のべ二百人を超える歌手たちと、番組を作りあげてきました。クラシックから演歌、民謡にいたるまで、あらゆるジャンルに対応するマルチミュージックディレクターとして活躍されています。

一九六〇年、神奈川県鎌倉市で誕生した栗田信生さんが音楽の道に進むきっかけとなったのは、子供の頃、東京タワーで聞いた電子オルガンのデモ演奏でした。

クリスマスプレゼントで電子オルガンを手にし、音楽教室にも通い始め、数年後には、本人が楽器店の店頭でデモ演奏を行うまで腕を上げ、中学に入る頃には、観客のリクエストに応えられるよう、さまざまな曲をマスターしていきました。

十八歳のとき、単身フランスに留学し、あの『のだめ』の舞台にもなったフランスパリ国立音楽院に入学。ここで音楽書式学を専攻。和声法、対位法、フーガ法、オーケストレーションなどの各種賞をとり、学院を卒業しました。在学中より欧州各地で音楽活動を行い、三十歳で帰国。帰国後は、服部克久氏の音楽助手を務め、ミュージカル『シンデレラ』の音楽監督でデビューしました。

「ひとつものを作り上げるためには、みんながやる気を出さなくてはいけない。それを上手く引き出すのが編曲の仕事かな。演奏する人、歌う人が心地よく歌える環境を作る。譜面は単なる伝達手段ですね。」

「日々、バージョンアップしなくちゃいけないですよね。百回同じ曲をやっても百回違わなくちゃ。それも良くなる方向にね。」

「音楽は生き物。音楽を育てましょう。」

以上はエレクトーン奏者の第一人者である、冴崎賢一氏との対談の中での栗田信生さんの言葉です。音楽と向き合う姿勢が簡潔に表現されていると同時に、誰もが人間として生きていく中で、最も大切なものを語られているようにも受けとれました。

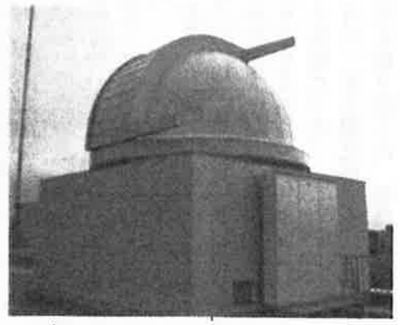
＊『のだめ』、正式名称は『のだめカンタービレ』、二ノ宮知子による日本の漫画作品。『のだめ』は主人公である音楽家・野田恵の愛称。

（取材　瀬川・伊藤・稲岡委員）

都立高校に天文台【都立大森高校】

都立大森高校の特色である施設の天文台が平成二十六年二月に西蒲田二・三丁目自治会の近隣住民の方々に公開されました。

四階建て校舎の屋上に設置された天文台で、校舎を見上げると外観のドームでわかります。



大森高天文部が部活動として日々観測しているそうで、筆者の母校であり、昭和三十六年入学当時から存在していました。

天文台施設のある高等学校はあまり無いと思われますので、可能な限り公開していただく事を望んでいます。

天体観測は、晴れた日の夜でのみ星空が見えますが、運が良くないと観測出来ません。

今後は九月に小中学生向け「天体望遠鏡を用いた天体観測」が開催されるとの事ですが、締切が八月二十八日ですのでこの記事を目にされる頃は申込期限が過ぎています。次の一般向けは十一月一日から九日の土日全四回「天体望遠鏡を使った天体観測」を開催との事です。

応募期間は九月二十九日から十月十日ですので、学校に問い合わせて下さい。

なお、区報にも掲載されるとの事です。

大森高校の沿革は一九四三年第二十三中として、府立第一中（現在の日比谷高校）に併設の形で開校し、一九四七年（昭和二十二年）に西蒲田二丁目に移転して現在に至っています。

一九五〇年（昭和二十五年）に都立大森高等学校と改称されて男女共学となりました。

卒業生には行政分野・経済分野・学術分野・タレントなど多数輩出しております。

特に毒蝮三大夫さん、なべおさみさん、龍虎さん等、皆様が御存じのタレントさんが卒業生におります。

蒲田近辺では、東急線の蒲田駅近くの高架わきに店舗があるメガネヤマトさんの屋上に天文台がありますが、現在は使用を中止しているそうです。

昭和四十一年に造られて近隣の小中学校、高校の生徒さんが大勢見学に来たそうです。

機材の老朽化等で十年程前に使用中止にしたそうです。

（取材　飯嶋委員）

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31，714人
	女	29，376人
	計	61，090人
世帯		33，964世帯

平成26年8月1日現在

編集後記

本紙第五十二号四面でご紹介した蒲田の屋上観覧車が、今年十月に復活することが東急プラザより発表されました。

長年、蒲田のシンボルとして親しまれてきた観覧車が復活するとのことで、喜ばれた方も多かったのではないでしょうか。

また、観覧車の復活に伴い、新たに名前を募集するそうです。初代「お城観覧車」、二代目「グレ太の観覧車　フラワーホイール」に次ぐ、三代目の名前に選ばれたあかつきには、生涯無料の観覧車乗車カードが贈呈されるそうです。

応募は、東急プラザのホームページから行え、締切は九月七日までとなっています。

かまにし17をお読みいただき、ありがとうございます。情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などございましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

宮川泰夫の「のど自慢」がゆく

『のど自慢・イン・ブラジル』

日本中が長野オリンピックで沸きたっていた平成十年（一九九八）二月初旬、ゲストの五木ひろしさん、由紀さおりさん・安田祥子さん姉妹と、地球の反対側、サンパウロに飛びました。

「のど自慢」史上初の海外開催が実現しました。今年（平成十年）は日本からブラジルへの移民が始まって九十周年。それを記念してついに海外へ。ブラジル百三十万人の日系の人々の長年の要請にようやく応えることができました。

ブラジル最南端ウルグアイとの国境の街からやって来た八十五歳のTさん。「北海道にいる兄が九十歳になる。自分の元気な姿を見せられる最後のチャンス」と、なんと二八〇〇キロの道のりを長距離バスを乗り継いで三十二時間かけて来てくれました。

十四歳の時にブラジルに渡って以来一度も日本に帰ったことのないSさん八十一歳。はるか六十七年前の日本の山河を思いながら歌うは「千曲川」。

大会終了後「のど自慢」班には「感動した」「また企画してほしい」という手紙や電話がたくさん届けられています。歴史的なビッグイベントは大成功のうちに終わることができました。

年百六十日を旅するアナウンサー

キンコンカーンと鐘が鳴って始まる「NHKのど自慢」。昭和二十一年（一九四六）の放送開始以来、五十五年目（平成十二年現在）に入るという「超」長寿番組です。

その司会を担当して七年。〝歌と出会いの旅〟を続けています。

旅は年間五十ヵ所。「のど自慢」は人と会場さえあればどこへでも出かけて行くので、場所はまさに全国津々浦々。

毎週、金・土・日曜日は、スーツケースをさげて旅の空。サラリーマンですから、週休を二日いただくと、東京・渋谷のNHK放送センターに出勤するのは二日だけ。「のど自慢」の司会者は、旅が仕事のようなものです。

（「宮川泰夫の『のど自慢』がゆく」二〇〇〇年一月発行より）

生い立ち

宮川泰夫氏は昭和二十年四月十四日、新潟県柏崎市で男子三人、女子二人、五人兄弟の末っ子として生まれる。

昭和十九年夏、小学校教員であった父は学童集団疎開の引率教員として富山県に赴任。身重の母は、学童疎開に参加した長女を除く幼子三人を連れ、父の出身地である柏崎に疎開した。

疎開前の宮川一家は、東京市蒲田区原町九番地（現・多摩川二丁目六番、矢口消防署付近）に居住していた。

泰夫氏が誕生した翌日、四月十五日には米軍の大空襲により京浜地区、とくに蒲田区の八割が焦土と化した。もちろん旧宮川邸も全焼した。

終戦後、一家は住み慣れた蒲田に戻ったが、居所は戦前の住所に近い小林町六十一番地（現・新蒲田二丁目十番）に落ち着いた。やがて学齢期に至った泰夫氏は、父が教鞭をとる矢口東小学校に入学する。

悪戯大好き少年

泰夫少年の家から南に二百メートルほど離れたところに、碍子工場の焼け跡が放置されていた。ここは付近の子どもたちにとって、冒険心を満たす格好の遊び場であった。広大な原っぱ、半壊した溶鉱炉、コンクリート製の高い煙突、碍子の材料だった石灰の山等々。

学校から帰るなり、子どもたちはきそってこの場所へ集合した。もちろん宮川少年も常連の一人であった。三角ベースボール、かくれんぼ。温かい石灰の中に団子状にかたまって冬眠しているトカゲを掘り出して、一匹ずつ串刺しにし、道路に並べておく。通りかかったオバサンや女の子を「キャ！」云わせる悪戯も。しかし、常連の一人が煙突の途中から落下、死亡する事故をきっかけに工場跡地は閉鎖されてしまった。

また、多摩川も一年を通し遊びの舞台となった思い出の場所である。

伸びきる前のススキの株、間隔をあけた二株の上端をしっかりと結び付け、素知らぬふりをして友達を呼ぶ。相手が足を引っ掛け、転べば大成功、落とし穴より簡単で成功率も高い。

上級生に負けまいと、川幅百メートルを往復泳ぎきった。（現在は「危険！遊泳禁止」の看板が立てられている）

棘のある草の実を投げつける。マジックテープ状の棘がセーターなどにしっかりとからみつき、払い落とすぐらいでは絶対に取れない。名前は知らない、何処にでも生えていた草だったが、最近は目にしなくなった。

土手の段ボールすべりは楽しかった。かじかんだ手でしっかりと段ボールの先端を握り、土手の上からすべり下りるスリルとスピードがなんとも快感だった。

宮川一家と親交が厚く、矢口東小学校を振り出しに、教員生活を永く続けてきた浅野ケフ子さんは、

「ヤッチャン（泰夫氏）はとにかくヤンチャで活発な子どもでした」

目を細め、昔を懐かしみながら思い出に浸る様子が印象的であった。

御園中学とブラスバンド

東急の線路を挟んで、西口の飲み屋街が密集していた。校舎の周りにも木造アパートが立ち並び、水商売のお姉さんが多く住んでいた。授業の終わる頃、銭湯から帰ってきたお姉さんたちが、店に出かける支度が始まる。学校は二階教室の窓を目隠しで覆ってしまった。年頃の生徒たちには刺激が大き過ぎたのだ。

中学の部活はブラスバンド部。華やかなトランペットを吹きたかったが、割り当てられた楽器はアルトサックスであった。指揮者は軍楽隊あがりの怖い先生。ゲンコツ付きの厳しい指導を受けた。加えて大学時代に合唱団での経験がのちのち、音楽番組担当の際、大きく役に立った。

NHK入局と「のど自慢」

昭和四十三年、都立小山台高校を経て東京大学文学部社会学科を卒業。同年、NHKに入局した。

長崎、帯広、福島、仙台の各支局に勤務した後、昭和六十一年より東京アナウンス室に入室。

平成五年四月より平成十七年三月までの十二年間、「NHKのど自慢」の司会を担当し、全国六百か所を訪ね、十五万人の方々と出会った。世界大会もブラジル・サンパウロを皮切りにペルー、アメリカ（ハワイ・サンフランシスコの二か所）、アルゼンチン、中国、カナダ、シンガポール、イギリスの八か国の司会を担当し世界的に親しまれる存在となった。

「のど自慢」を担当して六年目の著書『のど自慢が行く』の中で、本番出場者との六一一〇回の「一期一会」について語っている。**「熱い時間と興奮を共有し、人生のハイライトシーンをご一緒させていただきました」**十二年間の「一期一会」は単純に二倍すると、一二二二〇回になる。

他に「ひるのプレゼント」「モーニング・ワイド」「紅白歌合戦」の総合司会、「NHKスペシャル」等を担当した。

平成十七年、六十歳で定年。以後はフリーの立場で、ラジオを中心に活動している。

現在はNHK深夜放送番組、「ラジオ深夜便」のアンカーとして、第二・第四の月曜日を担当。アンカー経歴十年、ベテランの味を出し、多くのファンを持っている。

各地での講演活動も多忙で、音楽を取り入れた独特のスタイルと、メリハリのある声。ユーモアに富んだ巧みな話術に聴衆は引き込まれて行く。

郷土史研究家・宮川茂氏

父・宮川茂氏について一言ふれておきたい。

昭和四年より昭和三十年までの二十六年間、大田区立矢口東小学校の教壇に立つ。馬込第二小学校を経て、昭和三十五年、大森第二小学校校長に就任、つづいて昭和四十年、千鳥小学校校長を歴任。昭和四十四年、定年を目前にして逝去。

戦前、戦中から戦後まで矢口東小学校の在籍期間が長く、教え子の数は千人を超える。最後の教え子も、すでに七十歳半ばを過ぎている。

宮川先生の教え子、数人に取材することが出来た。一様に「郷土クラブ」の思い出を口にした。

土曜日の放課後、学校から直接に、近くの神社、仏閣へ。

日曜日は朝から弁当を持って、矢口渡駅に集合。この日は沼部駅から満開の桜に沿って、六郷用水をたどり、最終目的地は世田谷九品仏。多摩川台公園で古墳を見学し、地図を手に先頭を歩く先生のあとを、十数人の子どもたちが従って歩く。とにかく楽しかった。

宮川茂氏が、大田区報第二七五号（昭和四十年六月一日発行）から第三〇八号（昭和四十五年三月一日発行）まで五年近くの間にわたり執筆した『大田区の歩み』が、区民読者の要望により一冊の本となって出版された。

残念なことに、昭和四十四年十一月、突然の病に倒れ、最終項の「大田区の誕生と六三制の出発」のみを大田区報編集部が代筆掲載されたものである。

（取材　都築、大良委員）